

歴史特別企画

高野山の歴史散歩

7月14～15日の一泊研修に21名が参加、都市部との気温差5度の宿坊での実施でした。

私の故郷は、仏教王国(?)の滋賀県湖北にあり親鸞聖人以降の浄土真宗各派が、しっかりと各家庭に根を張っているところです。その宗祖にあたる法然上人は叡山延暦寺の学徒一方の空海が開いた真言密教の道場・高野を訪れる事に大きな楽しみがありました。金剛峯寺や壇上伽藍、各塔頭、奥の院、そして御廟 下調べも何もなく見て来よう、なにか感じる事があるのかもという気ままな感覚で参加したものです。

講師「柴谷宗俣」様は、四国御遍路の大先達であり、無量光院に籍を置かれ更に研究を進めておられる方でその解説による環境は、恵まれた2日間でした。

これまでも様々な「曼荼羅」を拝見してきましたが理解できていません。思想を図式化したものと言われても何か今ひとつよくわからないのが実態でした。弘法大師空海が説かれた悟りの人 大日如来(菩薩の中心となる存在)と自分自身の中にある心との一体化をめざすもの。人にも草木にも命があり其々が宇宙の構成員であること、等などお話しを伺ったり、解説書を見たりしますと少し理解ができたような感じになりました。

現在、日本人の宗教心というものは、明治の初め 廃仏毀釈運動が展開され 神道を無理やり天皇制と結び付けて以来 神道と仏教の間には大きな溝ができてしまい、更に戦後の教育が宗教を排除した事等もあり、「一木一草の中に神仏を見るという日本人の心性を培った信仰心が失われた(梅原猛)」事が現状でありましょう。遠い昔からの日本人の宗教心は 八百万の神を受け入れる多神教であると今回の参詣で確信したものでした。仏教の原理は、平等、自由な知恵、慈悲であるそうです。高野山の地に仏教聖地を作ろうとした時に「丹生明神・狩場明神」

をお祀りしたとある事もうなずけますし、奥の院参廊脇に設けられた、数多の墓石への広い度量も納得できるものと思えました。「鳥居」が、随所にある事も理解できました。鳥居の源流が古事記の神話に示唆するように「人界と神域を結ぶ回路」であり、神域の神とは、神も仏も含まれると考えると納得したものでした。

真言密教が認知された818年ころは、京都東寺が、布教と信仰の場であり、都での根拠地でした。もう一つの根拠地、森の高野山は空海が思索、悟り、大日如来との孤独な対話を行ったところであったようです。大師入滅後の「高野山の歴史」を見ますと、頻りに火災にあい堂塔伽藍が何度も焼失してしまったり、金剛峯寺と東寺の争いが生じたりと、聖地が維持できなくなるような時期もあったと聞きました。長い歴史の中の栄枯盛衰を想う時、それでも連綿と法灯が引き継がれ開創1200年を明年迎える事が、なんと大変な事であろうかと実感します。

高野山は特別な聖地として多くの先人・貴人が参詣し心のよりどころとして今日に至っています。仏教原理の積年の積み重ねが、源になっているのであろうと思います。奥の院の静寂 左右を埋める石碑参道を、ゆったりと歩み 弘法大師ご廟に再度お参りしたいと思ったものです。森=木を愛した空海には、金堂や経堂が似合うと愛着を感じました。

(阿部 和生)

参考資料：梅原猛著「日本の仏教を行く」



金堂